政府は「個人への補償は韓国政府が行うので、日本は韓国政府へ一括して支払うべき」とし、現金合計21億ドルと各種現物返還を請求。次の日韓交渉で日本は韓国政府へ一括支払いは承諾したが21億ドルと各種現物返還は拒否し、その後、請求額に関しては韓国が妥協して、日本は前述の記載通り「独立祝賀金」と「発展途上国支援」として無償3億ドル、有償2億ドル、民間借款3億ドルの供与及び融資を行いました。個人への保障は政府が行うとのことでしたが、このとき実際に、慰安婦への保障はされたのでしょうか。参考資料①

あなたの述べた文中で、金額と名目に差異があります。実際は無償3億ドル、有償2億に、工場プラント1億譲与でした。これを当時は3+2+1と読んでいたそうですが。日本側がその賠償額を「独立祝賀金」や「発展途上国支援」とか一方的に名づけたものの、韓国側の同意を得たわけではありません。韓国では「対日請求権」と呼ばれたと記憶していますし、慰安婦賠償問題はどちらにも案件に載せてない状態だったようです。

『サンフランシスコ条約』に関しまして、「南北戦争中、勝戦国と日本側がその内容を「一方的に決めることになった」というふうにおっしゃっていましたが、この当時の状況はどのようなものだったのでしょうか。参考資料②

サンフランシスコ条約は日本側だけがうるさく言っていますが、法的な価値は全然ないし、これ以上日本が無理を押し続けても世界中の非難を浴びるだけだと思います。添付しました独島（竹島）に関する資料が韓国外交部の公式立場ですし、歴史的にも無理のない事実であります。下記は独島に関する大韓民国の外交部の公式立場です。ご参考までに。http://www.youtube.com/watch?v=7ido7y1VodA

朴正熙大統領はその当時、韓国国民からはどのように思われていましたか？

日本側にほぼ全部取られて譲ったと、国内世論は最悪でした。それに学生たちの「韓日会談無効」を叫ぶデモで日が立ち、デモで日が暮れる毎日でした。朴と金鍾必は国を売った最悪の売国奴として罵倒されていました。

デモを行うこと自体がその会談が一度は成立したことの裏づけとは考えられないのでしょうか。

いいえ。軍事クーデターで執権した正統性のない政権が、国民的な意見聴取なしに急いで一方的に押し付けた合意は、国民の共感なき、いや国民無視の会談結果だったので憤怒したわけです。もちろんそういう結果に賛同できないとはっきり言わないといけないから、デモで反対の意思を表現しないといけなかったのです。

グレンデールの慰安婦像設立のあと、日本人であるというだけで子供たちがいじめにあっているということですが、これについては認識はありますでしょうか。

全然ないことで、日本人特有の嘘だと思っています。韓国人は子供のときから小人輩（心の狭く子供っぽいことをやる度量のない者）にやられたことを同じことで返すと、自分も小人輩になる、との教育ですので、そんなことはしません。逆に日本人がそんなことをやるなら「やはり島国の者だ」と嘲笑うのが韓国人でしょう。

では、いじめがあるないは別にして、建設することで人種を問わず分別のつかない子供たちの間でいじめが起こる可能性は無視できないと思います。現地の日本人と韓国人や中国人同士のトラブルを招くといった発想はお持ちでしょうか。具体的に対応策は考えていますか？

加害者の日本が反省せず、さらには被害者の元慰安婦のお婆さんたちを侮辱していることを棚に上げて、自分の子供たちにまだ遭ってもないことを想像して叱るなんて、やはり日本らしき手法だと思われるでしょう。対応策も何も日本側がやることをやれば問題は自動的に解決されるはずです。

慰安婦問題に関しまして、双方の国家間はもちろん、国内ですらも意見が対立する中、首脳会談が行われないといった状況で、いまだこの真意も判断できない状況とも言えますが、このタイミングで「20万人の被害者」と記した像の建設に着手するというのは、やや時期尚早という声も上がっているようです。決議に踏み切った理由をお聞かせください。

安部総理をはじめ、右翼自民党の立場は、歴代の総理大臣らが慰安婦に対し、談話を通じて謝罪したことを否定している状況で、日本の蛮行を全世界に知らせて孤立させることで、何が悪かったのかを自ら気づかせるしかないと判断したわけです。常識のあるものなら時期尚早じゃなく晩事之嘆と直すべきじゃないですか？

晩事之嘆とは韓国の言葉でしょうか。

はい、韓国の四字成語です。意味は「遅すぎて怨み嘆く」との意味です。

従軍慰安婦につきまして、当時は儒教が強く、元慰安婦は、処女を失った自分は家族に合わせる顔がない、とひとり孤独に死んでいったという悲しい話を聞きました。行く場所がない人はソウルなどに集まって皆で暮らしていた。またオーストラリアにも、もと慰安婦で生存者がいると伺いましたが、これは本当でしょうか。

韓国人の慰安婦がオーストラリアにいるとは聞いたことがありませんが、オランダ人の元慰安婦のお婆さんがアデレードにお住まいで、数年前シドニーの慰安婦対策委員会の招待でシドニー集会に参加したときに会ったことがあります。その同行に韓国から来た吉の名字のお婆さんがシドニーで証言したときのデモにも参加したこともあります。

シドニーの慰安婦対策委員会とは、どのような活動をされていますか？　吉さんの証言をされたときの状況をお伝えください。

元慰安婦たちを助ける活動です。吉さんは2回ほど委員会の招待に応じてシドニーに来たことがあります。シティの日本総領事館の前で忌憚大会を開いたとき、被害者として証言したことがあるようです。

1983年に吉田清治の『私の戦争犯罪　朝鮮人強制連行』という本を出していますが、これはご存知でしょか。吉田は済州島で日本軍人らを引率し、若い未婚女性や赤ん坊を抱いた母親を連行し、レイプしたという「体験」を語っています。一方で『済州新聞』は、現地住民はそのようなことはなかった。吉田は嘘をついていると語っていると、1989年8月14日同紙に記載されています。これ以降で慰安婦問題が浮上したとも言われているようですが、これに関してはどのように考えていますか？　参考資料③

唐人行さんのことを聞いたことがありますか？　明治維新以降、幕府は人種純化の名目で九州の長崎など外国の貿易船が入出港する所で、西洋人船乗りとの性交を通じて生まれた間の子の女性が多かったんです。幕府は彼女らを海外へ追い出して血統の純粋さを守ると考え、10～20代の女の子らを強制に船に乗せて、韓国（当時は朝鮮）や中国、東南アジアへ送りました。彼女らは技術も才能もありませんでしたが、生存するため外国の港町の酒場で笑いと体を売って生活を営為したようです。彼女らにとって日本は自分を追い出した憎い祖国ですが、それにも関わらず自分の家族たちに売春で稼いだ金銭を送金していたようです。一方それを見ていた文無しののらくらが、今度は混血じゃない普通の家庭の女の子たちを拉致して、海外に売り始めました。もちろん都市の家庭の子の拉致はばれる危険性が高いので、田舎の貧しい家庭を訪ねて8歳から10代の女の子らを収集して海外へ送りました。このときは拉致じゃなく、堂々と親の許可で連れて行ったケースも多かったようです。貧乏の家に口数を減らすため、後で金をたくさん稼いで送金してもらうと言えば、反対する親は特にいなかったわけです。隣の家の人が娘を売ると、海外から送金が届き、土地と新しい家を買っている。それを見ていた周りの女の子たちは、自分も唐人行になってお金を稼ぎたいと夢をみるようになりました。親を説得して連れて行くのが難しい家庭では、誘拐ないし拉致をして国から売り出していました。そういうわけで東南アジアの各国の港町は、日本から唐人行で売春商売が盛り上がっていたようです。戦争のときは、彼女らが祖国のために募金して日本政府に送った戦費が無視できないほどの金額だったといいます。明治以降、終戦のときまでアジアの各国で商売をしてた唐人行は、大体3万名だったそうです。日本の海外輸出第一号はトランジスタラジオじゃなく、唐人行だといいます。私がこの話をする理由は、戦争のときの慰安婦拉致、誘拐は日本軍人らを引率し、若い未婚女性や赤ん坊を抱いた母親を連行し、レイプしたという体験を著書「私の戦争犯罪」で語っている。一方で『済州新聞』は、現地住民はそのようなことはなかった。吉田は嘘をついているとして1989年8月14日、同紙に調査の結果を記載している。これ以降で従軍慰安婦問題が浮上したとも言われている。

吉田は自著の虚偽を指摘された後も韓国での謝罪行脚や朝日新聞での証言を続けたが、1995年、「自分の役目は終わった」として著書が自身の創作であったことを認め、1996年5月の週刊新潮インタビューで以下にように語った。

「まあ、本に真実を書いても何の利益もない。関係者に迷惑をかけてはまずいから、カムフラージュした部分もある。事実を隠し、自分の主張を混ぜて書くなんていうのは、新聞だってやることじゃありませんか。チグハグな部分があってもしようがない」（週刊新潮1996年5月）。

吉田の証言は国連クマラスワミ報告（1996年）やアメリカ合衆国下院121号決議（2007年）などの事実認定でも有力な証拠として用いられている。

参考書類③ 1983年
私の戦争犯罪朝鮮人強制連行 吉田清二

参考書類④ 1981年
朝日新聞が初の慰安婦報道

新聞記者・朝日新聞社社員の植村隆は、1991年にいわゆる従軍慰安婦問題を日本で初めて報道したが、事実に反する捏造であったと指摘されている。以下がその内容となる。

日中戦争や第二次大戦の際、「女子挺（てい）身隊」の名で戦場に連行され、日本軍人相手に売春行為を強いられた「朝鮮人従軍慰安婦」のうち、一人がソウル市内に生存していることがわかり、「韓国挺身隊問題対策協議会」（尹貞玉・共同代表、十六団体約二十万人）が聞き取り作業を始めた。同協議会は十日、女性の話を録音したテープを朝日新聞記者に公開した。テープの中で女性は「思い出すと今でも身の毛がよだつ」と語っている。体験をひた隠しにしてきた彼女らの重い口が、戦後半世紀近くたって、やっと開き始めた。

尹代表らによると、この女性は六十八歳で、ソウル市内に一人で住んでいる。（中略）女性の話によると、中国東北部で生まれ、十七歳の時、だまされて慰安婦にされた。二三百人の部隊がいる中国南部の慰安所に連れて行かれた。慰安所は民家を使っていた。五人の朝鮮人女性がおり、一人に一室が与えられた。女性は「春子」（仮名）と日本名を付けられた。一番年上の女性が日本語を話し、将校の相手をしていた。残りの四人が一般の兵士「二三百人を受け持ち、毎日二四人の相手をさせられたという。「監禁されて、逃げ出したいという思いしかなかった。相手が来ないように思いつづけた」という。また週に一回は軍医の検診があった。数ヶ月働かされたが、逃げることができ、戦後になってソウルへ戻った。結婚したが夫や子供も亡くなり、現在は生活保護を受けながら、暮らしている。

参考書類⑤ 1944年8月15日
歴史認識にときおり用いられる アメリカ公文書一部抜粋

UNITED STATES OFFICE OF WAR INFORMATION
Psychological Warfare Team Attached to U.S. Army Forces India-Burma Theater APO 689
Prisoners: 20 Korean Comfort Girls　Date of Capture: August 10, 1944

序文

この報告書は、ビルマのミートキーナ陥落後の掃討作戦において1944年8月10日頃に捕虜とした20人の韓国人慰安婦、および2人の日本の民間人の尋問から得られた情報に基づくものである。報告書は、日本人がどのように韓国人慰安婦募集したか、慰安婦達の置かれた生活や労働の条件、日本兵との関係や対応、そして軍事的状況への認識を示している。

慰安婦は、単に軍人にサービスするため日本軍に付加された売春婦、または“プロの非戦闘従軍者”以上のものではない。“慰安婦”という言葉は日本人に特有のもの。他の報告は、どこであれ日本軍が戦うために必要な場所で“慰安婦”が確認されるということを示している。しかしながら、この報告書は、もっぱら日本人により募集されて、ビルマの日本軍に配属された韓国人“慰安婦”を対象としているもの。日本人は1942年に約703人の慰安婦をビルマに送ったと報告している。

慰安婦の募集

1942年5月初め、新たに占領した東南アジアの日本の占領地での“慰安サービス”のため、韓国人女性を募集する目的で日本の業者が韓国に到着した。この“サービス”の内容は明確にされなかったが、病院の負傷者を訪問し、包帯を巻き、そして一般的に軍人を楽しくさせる事と関係した働きだと思われた。これらの業者が用いた誘因は、多額のお金であり、家族の負債を返済する機会、楽な仕事、および新天地シンガポールにての新たな人生の見通しであった。これらの虚偽の表示に基づき、多くの女性が海外での仕事に応募し、数百円の前払金を与えられた。

女性達のなかの幾人かは以前に“売春”を　生業としていたものがいる。彼女らがサインした契約は、彼女達を、前払いを受けた家族の負債に対応して、6ヶ月から1年の期間、軍の規則および“舎監”と戦争に拘束するものであった。約800人の女性達がこの様に募集され、通常は日本軍の陣地近くの相当な大きさの町に配された。

通常、ミートキーナでは女性達は各々の女性の個室がある大きな2階建に宿営した。そこで女性は生活し、眠り、そして仕事をした。舎監から必要なものを購入した。彼女達は食物と物資について制限されておらず、そして欲しい物を購入するためのお金を十分に持っていたため、良い暮らしをしていた。

彼女らは服、靴、タバコ、および化粧品を購入する事ができた。またビルマでは、将校および一般兵の双方と共にスポーツ大会に参加し、ピクニック、娯楽、および晩餐会に出席して楽しんだ。彼女らはレコードプレーヤーを保有し、そして町では買い物に行くことが許されていた。

1943年後半、日本軍は前払い金の債務を返済した女性は帰国する事ができるという命令を出した。何人かの女性がこうして韓国に帰国する事ができた。

彼女達は全ての方式の避妊具を供給され、そして、しばしば、兵士は自身が軍から支給された物を持参して利用した。彼女達は、衛生の問題に関し、自分達と顧客の両方の世話をする訓練を受けた。週に1度、日本の正規の軍医が各慰安所を訪れ、病気にかかった女性は治療を受け、最終的には病院に送られた。

兵士の反応

兵士から慰安婦への多数の求婚の例があり、そしてある場合には実際に結婚が行なわれている。

日本人兵士達は、しばしば、家から雑誌、手紙、新聞を受け取る事がどれほど楽しいものであるかを語っていた。また、彼らは缶詰、雑誌、石鹸、ハンカチ、歯ブラシ、ミニチュアの人形、口紅、および木製の衣服で一杯の慰安袋への中身について語っていた。口紅と衣類は女性用品であり、女性達は家族がなぜそうした物資を兵士に送るのか理解できなかった。彼女らは、送った者は単に、自分達、あるいは現地の女性達への贈り物が念頭にあったのではないかと推測した。